

H. Lautensach の地誌学研究 ——「地理的形態変化論」の成立を中心に——

田 村 百 代

I はじめに

Hermann Lautensach (1886-1971) は、イペリア半島・朝鮮半島の地誌の研究によって、また独自の「形態変化論 Formenwandellehre」によって広く知られている。彼の地誌学研究や「形態変化論」については、いくつかの地理学史の著書¹⁾の中で触れられているが、彼の地誌学説がどのようなものであり、「形態変化論」が彼の地誌学研究においてどのような役割を果たしてきたのか、というような具体的な問題については取りあげられていない。広重徹²⁾が指摘するように、学問の歴史は偶然的な個別的事象の単なる集積ではないのであり、個々の科学的認識が、どのような歴史的契機に媒介されつつ展開したかについての詳細な研究を積み重ねていかなくてはならない。

本稿では、Lautensach の地誌学研究の中に「形態変化論」がどのように組み込まれてきたのか、という点に視点を置きながら、彼の「形態変化論」の形成過程、並びに彼の地誌学説について考察する。

II 地形学から地誌学へ

1 1920 年代のドイツ地理学

20 世紀前半のドイツ地理学においては、地形学の A. Penck、とくに地誌学、地理学の方法論・本質論の分野で活躍した A. Hettner、そして人文地理学を「文化景観の形態学」として把握した O. Schlüter の影響力が大きかった³⁾。Hettner の古典 “Die Geographie, ihre Geschichte, ihr Wesen und ihre Methoden” がまとめられたのは 1927 年

のことであった。彼は地理学を、自然を基にした因果関係の科学、すなわち “Chorologie” であるとし、場所的な差異という点から地域の性格を明らかにする科学である、と定義した⁴⁾。Hettner にとって「地域の本質」は、①場所的な差異と、②種々の自然界や、それらに含まれる種々の現象の因果関係に存在するのであり、地理学は「地誌学 Länderkunde」と呼ばれてこそ、最も良くその研究内容を表現できる、と主張している⁵⁾。

一方、Schlüter は「Chorologie としての地理学」を否定し、「自然 Landesnatur との直接的な因果関係⁶⁾」にはとらわれずに、地形学にならって「相観上 physiognomisch」、すなわち「形態上 morphologisch」把握可能な「景観像 Landschaftsbild」を人文地理学の新しい研究対象に設定している。また彼は、同じく地形学にならい、発生論の考察方法を人文地理学へ導入し、景観の構成要素としての文化景観像を記載し、それらを起原という点から解明することを提案した⁷⁾。

1920 年代は、後のドイツの「景観 Landschaft」概念に大きな影響を及ぼした S. Passarge の「景観学 Landschaftskunde」が確立した時期でもある。彼はすでに 1912 年の論文⁸⁾において、“natürliche Landschaft” の比較研究であり、後に「景観学」として展開する「景観地理学 Landschaftsgeographie」について触れている。1919 年から 20 年にかけては “Grundlage der Landschaftskunde, I-III” を、続く 21 年から 24 年にかけては “Vergleichende Landschaftskunde, I-IV” を発表した。「比較景観学」とは、「景観タイプについての学問」

をさし⁹⁾、個々の地域の「一般性 allgemeine Wesenszüge」と「個性性 individuelle Wesenszüge」との分離から出発する¹⁰⁾。彼は、18世紀のスウェーデンの生物学者 C. von Linné による生物分類にならった「景観タイプのシステム」を明らかにした¹¹⁾。

景観の「調和 Harmonie」についての議論や、景観を有機体と対比させ、「生理学的分析」として景観へ働く力の作用、すなわち営力についての考察が盛んになったのも1920年代のことである¹²⁾。1928年には H. Spethmann により“Dynamische Länderkunde”が発表された。この中で彼は、自然に基盤を置いた「因果の秩序 Ursachenreihe」に従って、一般には地形・地質・気候・水・植生・動物界・居住・経済・交通、および人間によるその他の活動の特色へと展開するいわゆる「静的地誌」を批判し、当該地域の「地域像 Erdrumbild」を形成する「地誌的営力 länderkundliche Kräfte」に注目したスタイルを採る地誌の研究を主張した¹³⁾。

2 地誌学への転向

Lautensach は、ベルリン大学において Penck の助手を務め、1910年には“Glazialmorphologische Studien im Tessingebiet”と題した学位論文を提出している¹⁴⁾。彼が地形学から地誌学へ転向したのは、1920年代後半のことである。1927年に初めてポルトガルを調査した彼は、まずポルトガルの海岸地形に関する教授資格論文¹⁵⁾の資料を収集したわけであるが、この際に行ったその他の調査の結果は、1932年と1937年に発表された2巻から成る地誌¹⁶⁾として、また1932年に発表されたポルトガルの地域区分に関する論文¹⁷⁾としてまとめられた。1930年以降はスペインの調査をも開始し、調査地域はイベリア半島全域へ拡大された。これらの結果は、1931年に F. Klute が編集した“Handbuch der Geographischen Wissenschaft”の中の「南東ヨーロッパ・南ヨーロッパ」編に収録された¹⁸⁾。

1933年の「系統地理学」編に収録された“Wesen und Methoden der geographischen Wissenschaft”と題した論文の中で Lautensach は、「地理学は…地域個別的な性格についての科学である」¹⁹⁾と定義し、また1938年発表の地域に関する論文では「総合が強いられている現在、当然地誌学が地理学の中心分野である、という確信が世界中至る所で地理学者の共通財産になっている」²⁰⁾と述べている。地形学から地誌学へ転向した彼の見解をよく表現しているといえよう。

1933年には、イベリア半島と同じくユーラシア大陸に存在し、しかもイベリア半島とほぼ同緯度に位置する朝鮮半島を研究地域として選定し、シベリア半島との「地誌的比較 länderkundlicher Vergleich」を目的とした調査を行い²¹⁾、朝鮮半島に関する2冊の地誌書²²⁾を著している。1964年には、30年以上にわたるイベリア半島の研究を集大成した大著“Die Iberische Halbinsel”²³⁾を発表した。

III 「地誌的形態変化」

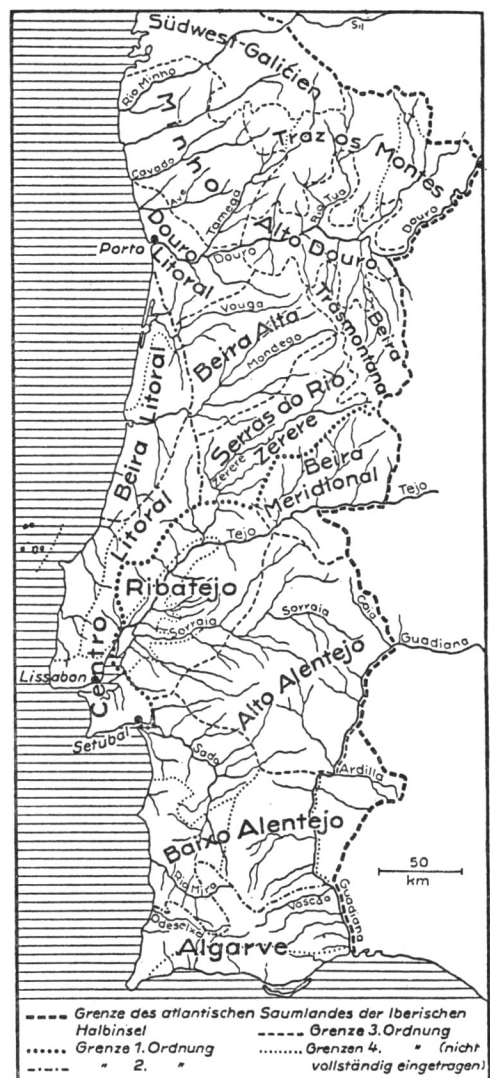
1 ポルトガルの「地誌的区分」

1932年の論文「ポルトガルの地誌的区分」²⁴⁾において Lautensach は、「イベリア半島の著しく多様な地誌的形態は、二つのまったく異なる規則的な視点から考察することが可能である」と述べ、この「規則的な形態の変化」を「地誌的形態の変化 Wandel der länderkundlichen Formen」と呼んでいる。1938年には「地誌的形態変化 länderkundlicher Formenwandel」という用語が使用されている²⁵⁾。彼によれば²⁶⁾、1930年代初期に発表された一連のイベリア半島に関する研究は、いずれもこの「形態変化」の視点が導入されている。「形態変化」の理論は、最終的には地域区分へと発展させることが可能であり、「形態変化」に基づいたポルトガルの地域区分は、すでに1930年以前に完成されていた²⁷⁾。ここでは、彼が地形学から地誌学へ転向

した当時の地域区分に関する見解と、初期の段階の「形態変化」の理論を明らかにするために、1932年の論文「ポルトガルの地誌的区分」²⁸⁾を取りあげたい。

「ポルトガルの地誌的区分」は、イベリア半島の地誌の研究に貢献する立場から明らかにされたものであり²⁹⁾、既述のように二つの規則的な形態の変化に注目している。南北に伸び、ヨーロッパとアフリカを結び付けているイベリア半島では、気候上、および気候に依存する自然や人文上の特色にまず南北の規則的な変化を認めることができる。また北から南へ侵入した Reconquista、南から北へと侵入したアラビア人の影響によって、気候に依存しない人文地理的形態にも南北の変化が生じている。第2に、半島がもつ大陸的な性格によって、周辺の平地から内陸のメセタへと地形・地質・気候において、さらに気候の影響を受ける植生・農作物において周辺から中心へと規則的な変化が生じている。彼は、周辺から中心への規則的な変化がとくにポルトガルの特色を規定している、という視点から、ポルトガル同様にイベリア半島の縁辺部に位置するスペイン領の南西 Galicien を、地形・地質・気候・植生などから考えた際にポルトガルから分離させることは不可能であるとし、この論文においてはポルトガルと、ポルトガルの北に隣接する南西 Galicien をまとめて一つの地誌的単位 *länderkundliche Einheit* とみなしている。一方東の境界は、自然上妥当なものがないこと、スペインとの国境が東西の言語の境界にほぼ一致していることから、国境を地誌的単位の境界に当てている（第1図）。

ここで注目すべきことは、「ポルトガルの地誌的区分」を発表した段階から、すでに彼は「形態変化」を気候と、気候に制約される自然上、人文上の形態だけに限定していない点である。この理由としては以下の2点が考えられる。後年、彼はドイツ地理学における「形態変化」の歴史を取りあげ、A. von



第1図 ポルトガルと南西 Galicienの地誌的区分
〔Lautensach, H. (1932) による〕

Humboldt, C. Troll などによる気候と、気候に制約される植生の変化だけでなく、C. Ritter, さらには F. von Richthofen による大陸上の地形の配列についても触れている³⁰⁾。第1点としては、中央高地・台地・縁辺低地と展開する各大陸上の地形の配列に注目し、タイプとして各大陸をとらえた Ritter³¹⁾の直接、間接的な影響が当然考えられよう。第2点としては、1920年代から Schlüter が主張

する方法論上の立場をとっている³²⁾、と彼自身が述べているように、何ものにも制約されず、形態上把握可能なすべての景観像を地理学の研究対象にしている点である。

Lautensach によれば³³⁾、「地誌的区分」はかなり大きな単位内での地誌的差異の概観が可能でなければならない。「ポルトガルの地誌的区分」は、第1図のように4段階から成り立っている。彼はまずポルトガルの南北の規則的な変化に注目し、第1段階として、ポルトガルを南北に二分する。第2段階として、北ポルトガルは周辺から中心への、すなわち西から東への変化に注目して二分される。一方南ポルトガルは、今日もなおアラビア起原の特色が濃い南部の Algarve が、一つの個別的な地域として区分される。第1段階から第4段階まで、すべて自然・人文を総合的に評価しているが、実際の境界線は地形に従っている。もっとも「……地誌的な地域区分を行う際の第1段階は、多種多様な現実の一般化である。それゆえ、研究の際には、より小さな単位が、より大きな単位よりも早く設定される」³⁴⁾ことになる。

上記のように、彼が主張した「地誌的区分」は、すべての地域が一つの論理的なシステムに従って区分されるのではなく、各段階ごとにそれぞれ異なる基準に従った区分が行われている。第1・第2段階では二つの規則的な変化に注目してはいるが、全体には位置の関係、「相観 Physiognomie」として把握可能な形態、景観像の因果関係のように「当該の地域の本質」を決定する重要な要素を評価し³⁵⁾、「本質的に自由」な³⁶⁾、「現実の個性を重視した区分」³⁷⁾が展開されている。

2 「地誌的一般化」

前節において取りあげた「地誌的区分」と並んで、Lautensach は早くから「タイプとしての地域区分」の存在をも重視していた³⁸⁾。彼によれば³⁹⁾、地理学ではどんな研究も多様な現実の一般化と絶え

ず結合しているのであり、それは地図上での描写と同じである。一般化される程度は、地理学の研究の際にも地図の描写の際にも、そのスケールに従うことになる。すなわち彼にとって地理学とは、地域の個別的な性格を明らかにする科学であるが⁴⁰⁾、Passarge⁴¹⁾ 同様に、地域は個別性と一般性から成り立つことを早くから認めていた。1938年の論文⁴²⁾において Lautensach は、地域の一般性に注目した「地誌的一般化 länderkundliche Generalisierung」を提唱している。この「地誌的一般化」は二つの目的をもち、一つは当該地域の個性性を消去することであり、もう一つは当該地域の個性性の消去から始まって、世界に共通するタイプという図式に地域を秩序立てていくことである。後者の例として彼は、Passarge による自然を基にした「比較景観学」と、F. Jaeger による人文地理学上の区分⁴³⁾をあげているが、「しかしながら今まで、自然地理学・人文地理学という視点を同時に、十分考慮した全地表面の体系的な区分は出されていない」⁴⁴⁾と指摘している。

同じく 1938 年の論文において、彼は「形態変化」に触れて次のように述べている。「隣接する多数の地域の本質的な特色を比較すると、これらの特色は地域から地域へと、規則的な変化を基礎にしていることが時々確認される。私はこの視点を、とくにイベリア半島に対して展開させた……。半島はまず第1に緯度上の規則に従って生じる北＝南方向の形態変化、2番目に周辺＝中心方向における形態変化、3番目に西から東へ、すなわち大西洋から地中海へと移行するに従って生じる形態変化を土台としている。……これらの視点から、論理上確立された全半島の地誌的区分を展開させることが可能である」⁴⁵⁾。既述のように、1932年⁴⁶⁾に「南北方向」と「周辺＝中心方向」の「二つの視点」であったイベリア半島の「形態変化」は、この段階になると「東西方向」を含めた三つの視点が確立されている。

「形態変化」の考え方は、その後朝鮮半島の研究にも適用され、1945年の著書“Korea”においては①南北方向の形態変化、②東西方向すなわち日本海から黄海方向への形態変化、③周辺＝中心、すなわち沿岸部から内陸部への形態変化、そして実際には③と同時に生じている④高度による形態変化、の四つが取りあげられ⁴⁷⁾、彼は主として①と②の形態変化を基にして「朝鮮の地誌的区分」⁴⁸⁾を行っている。1940年代中期までの彼の「形態変化」は、イベリア半島・朝鮮半島という個々の地域の一般性の把握の枠を越えず、文字通り「地誌的形態変化」であった。

IV 「地理的形態変化」

1 タイプとしての「景観」

1937年にイギリスでは、Geographical Associationの委員会報告として、“Classifications of regions of the world”と題した論文⁴⁹⁾が発表され、W.Köppen, A.J.Herbertson, Passargeなどによる数多くの地域区分の例を引きながら、タイプとしての地域を意味する“generic region”と、個体としての地域を意味する“specific region”とに「地域」を区別することが主張された。アメリカでは、1939年にR.Hartshorneによって“The nature of geography”が発表された。この中で彼は“The present confusion”⁵⁰⁾と題して、ドイツでは「景観」という用語が指す意味が必ずしも一定していないことを批判し、また“Methods of organizing the world into regions”⁵¹⁾と題した章においては、上記のイギリスの例にならって「タイプ」と「個体」という地域に対する二つの考察方法を取りあげている。

一方ドイツでは、既述のように1920年代にPassargeが「比較景観学」として、タイプとしての景観区分を明らかにしてはいたが、上記のイギリス・アメリカにおいて生じた明確な概念の分離にもかか

わらず、「個体としての地域 Raumindividuum」と「タイプとしての地域 Raumtyp」の区別は、少なくとも1930, 40年代には一部は不明確な、一部は多面的な「景観 Landschaft」という用語の使用によって、あいまいにされてきた⁵²⁾。こうした中で1941年にはN.Krebs⁵³⁾が、1949年にはH.BobekとJ.Schmithüsen⁵⁴⁾が、「地域」についての見解を発表し、「タイプとしての地域を意味する景観 Landschaft」と「個体としての地域を意味する Land」とを区別して使用することを主張している。Lautensachは1950年代に入ると、タイプと個体とを区別せずに「景観」という用語を使用してきたことは、ドイツの地理学方法論上約20年の遅れを生じさせ、とくに地域の類型化への道を阻んできた⁵⁵⁾、と指摘するに至った。しかし、彼自身の研究をみると、1945年の著書“Korea”においてはまだタイプ・個体の区別なく「景観」が使用されている。彼は早くから「地誌的区分」と「タイプとしての地域区分」とを分離させていたにもかかわらず、1950年代初期に発表された一連の研究⁵⁶⁾に至って初めて、“Land”と「景観 Landschaft」とを区別して使用したのであった。

2 「地理的形態変化」への到達

Lautensachが、完成した「地理的形態変化論 Geographische Formenwandeltheorie」を発表したのは1951年のことであり、彼は以下のように述べている。「私は1951年2月21日に、毎年ボン大学地理学教室がRichthofenを記念して開催する祝賀コロキウムにおいて……初めて、私が20年来没頭している“地理的形態変化 Geographischer Formenwandel”について講演を行った」⁵⁷⁾。翌1952年の論文“Der Geographische Formenwandel; Studien zur Landschaftssystematik”において、「地理的形態変化」とは地理的実体 geographische Substanz⁵⁸⁾の規則的、地域的な変化をさす、という定義を明らかにしている⁵⁹⁾。彼はこの「地理的形

態変化論」を基にして、1938 年の論文⁶⁰⁾において指摘した通り、総合的なタイプとしての地域区分を行った。しかし、ここで彼は、タイプとしての地域区分は「地誌的一般化」から生じる、とする 1930 年代の見解を捨て、初めから地理学が研究対象とする地理的実体の「連続性」に注目している。彼によると⁶¹⁾、地理的実体は陸地上で「一つの連続したものの ein Kontinuum」を形成しているものであり、この地理的実体の規則的、地域的な変化をさす「地理的形態変化」に注目した区分によってのみ、自然・人文を包括した総合的なタイプとしての地域、すなわち「景観」が生じるのである。これについて彼は以下のように論じている。「……地誌的区分を行う際には、地理的実体の連続性ではなく、個別地域 Individualräumen から出発する。そのため……個々の個性は相互に関連なく存在する、という考え方が助長された。この見解から十分な分類学を成立させることはできない」⁶²⁾。

彼は⁶³⁾、「地理的形態変化」を地理的位置の機能であるとみなす。彼によると、全地表面の体系的な景観区分にとって規定的な位置のタイプには、換言すると地理的実体の規則的な変化を説明する際に基礎となる位置のタイプには、①南北の位置 planetarische Lage, ②周辺＝中心の位置 mehr periphere oder mehr zentrale Lage, ③東西の位置 mehr östliche oder mehr westliche Lage, ④高度上の位置 hypsometrische Lage の四つが存在する。これらの位置の変化に従って、それぞれ①南北の変化 planetarischer Wandel, ②周辺＝中心の変化 peripher-zentraler Wandel, ③東西の変化 ost-westlicher Wandel, ④高度による変化 hypsometrischer Wandel の四つの規則的な地理的実体の変化を認めることができる。これらの規則的な変化は、彼自身「形態変化論は気候に基礎を置く景観学ではない」⁶⁴⁾と明記している通り、気候と、気候に依存する地理的形態・地理的現象の変化だけに限定されない。す

なわち初期の段階の「地誌的形態変化」同様に、1950 年代に入って発表された「地理的形態変化」においても、規則的な変化を追究する基盤には Schlüter が主張した「相観 Physiognomie」の立場が採用されている。

ここで四つの「形態変化」の事例をあげておこう。

①「南北の変化」⁶⁵⁾ は、南北に生じる地理的実体の規則的な変化をいい、地域区分の際にはほぼ緯度に平行した帯状の地域 “Gürtel” として表現される。彼は朝鮮半島における「南北の変化」の例として、気候上（年平均気温、平均降雪日数、降水量、河川の凍結日数、植物期間など）、気候に依存する植生上の南北変化をはじめ、南から北へと拡大していく農業経営規模の変化、南部に集中する都市の分布状態、北部における満州・朝鮮系の民族タイプと、南下するに従って支配的となるモンゴル＝マライ系の民族タイプなどをあげている。

②「周辺＝中心の変化」⁶⁶⁾ は、全地表面に共通する基準からみた「大規模な変化 Grosser Wandel」と、半島や島におけるように局地的に生じる「小規模な変化 Kleiner Wandel」とに分類され、地域区分の際には環状の地域 “Ring” として表現される。その他にも “Kleiner Wandel” としては、市場距離に従って生じる人口・経済地理学上の規則的な変化があげられる。朝鮮の半島部は、“Grosser Wandel” からみるならばユーラシア大陸の周辺部に位置する。彼は朝鮮半島に生じる “Kleiner Wandel” の例として、気候や植生の変化をはじめとし、半島の周辺部すなわち沿岸地域への工業・都市・人口・貿易・漁業の集中などをあげている。

③「東西の変化」⁶⁷⁾ もまた “Grosser Wandel” と “Kleiner Wandel” とに分類することができ、地域区分の際にはほぼ南北にのびた細長い地域 “Streifen” として表現される。部分的には「周辺＝中心の変化」と重複することになり、大陸の中心部では

実際にこれら二つの変化を分離させることは不可能である。「東西の変化」の“Grosser Wandel”は、とくに気候上明瞭に生じ、大陸の東海岸と西海岸、南北にのびる山脈の風上と風下を考えれば明らかである。日本はユーラシア大陸の“Grosser Wandel”の上で最も東部に位置し、また「周辺＝中心の変化」からみても“Grosser Wandel”の最も周辺部に位置する。彼は日本における「東西の変化」の“Kleiner Wandel”の例として、「裏日本」と「表日本」の区別をあげ、次のように述べている。「小規模な東西の形態変化は、日本列島における国民意識において大きな役割を果たし、普通裏側（裏日本）すなわち日本海岸は、表側すなわち窓側（表日本）から区別される」⁶⁸⁾。彼は東側の「表日本」から西側の「裏日本」への気候上の規則的な変化を認めるだけでなく、「日本人が裏側・表側という表現を使用する場合には、普通、とくに人文地理学上の意味が存在する」と指摘し、都市の分布状態や人口密度において生じる変化についても取りあげている⁶⁹⁾。

④「高度による変化」⁷⁰⁾は、山地が果たす「受動的な役割」と「能動的な役割」によって、二重の性格をもっている。前者は山地の高度が果たす役割をいい、たとえば植生・気温のように、高度の上昇と共に生じる規則的な変化を指す。後者は山地の形態が果たす役割をいい、山地の風上・風下において生じる種々の変化や、凹地形において生じる局地気候などを指す。「高度による変化」は、地域区分の隣には段階“Stufe”として表現される。

Lautensach は、以上四つの規則的な地理的実体の変化に注目し、陸地上の全地表面に共通する基準による世界で約 40 の「大地域 Grossraum」を考えていた。これらの「大地域」は、さらに局地的な「形態変化」に従って、個々の「景観」へ区分される⁷¹⁾。

V Lautensach の地誌学研究

Lautensach によれば、地誌学は個性の、系統地理学はタイプの追究を目的としている。系統地理学は各分野において取りあげる対象を①形態・現象という方向でも、②分布という方向でも類型化することが可能である⁷²⁾。①は地理的形態・地理的現象の発生論的な、また因果の考察に結び付いた法則の確立であり、分類上の類型化を意味し⁷³⁾、②の分布の類型化こそ「地理的形態変化」の究明に相当し、系統地理学の主要部を占める。すなわち「系統地理学 Allgemeine Geographie」は「一般形態変化論 Allgemeine Formenwandeltheorie」として把握可能である⁷⁴⁾。

彼は、ほぼ半生を地誌の研究に費やしてきたわけであるが、「地理的形態変化」の理論は、最終的に彼の地誌学研究にどのように組み込まれたのであろうか。地理学は地域をタイプとして、すなわち「景観」として取りあげる場合と、個体すなわち“Land”として取りあげる場合とがある⁷⁵⁾。地誌学は地域の個性を明らかにする分野であり、地誌学が対象とする地域は“Land”でなければならない。彼は「地理的形態変化」を基にして「景観」を決定したわけであるが、次にこの土地の断片に、その特色に適合した個別的な名称を与えることによって、「景観」を“Land”へ転換させている⁷⁶⁾。地理的実体には、「形態変化」の四つのカテゴリーからは把握できない部分が存在する。“Land”とは、こうした個別的な特色をも包括した概念である。

ではなぜ“Land”の基盤として「形態変化論」が必要なのであろうか。Lautensach によると⁷⁷⁾、これには「比較地誌学」の問題が関係している。どんな場合にも、比較する対象はタイプでなければならない。地理学の場合には、「景観」のみが比較可能となる。いくつかの地域を比較することは、地誌学にとって有効な方法であり、そのため地誌学で取りあげる地域は“Land”であり、一方では「比較」を考慮した「タイプ」でなくてはならない。

しかし、成果のある「比較」を行うためには、「地理的形態変化論」の基礎となっている「位置」という視点を常に考慮しなくてはならない。彼は Krebs の未完の著書 “Vergleichende Länderkunde” の編集を土台にして、以下のような位置のタイプを明らかにした⁷⁸⁾。

I 隣接する位置 Benachbarte Lage

- 1 南北での隣接
planetarische Nachbarschaft
- 2 東西での隣接
ost-westliche Nachbarschaft
- 3 周辺＝中心での隣接
peripher-zentrale Nachbarschaft
- 4 高度上での隣接
hypsometrische Nachbarschaft

II 隣接しない位置 Nichtnachbarte Lage

- 1 相応する位置 homologe Lage
例。東アジアと北米南東部
○地中海地域と他の亜熱帯海洋性地域
- 2 対立する位置 opponierte Lage
例。大陸の東海岸と西海岸
- 3 南北で対立する位置
planetarische opponierte Lage
例。グリーンランドと南極
- 4 類似した位置 analoge Lage
例。高山地域
○アラビア砂漠とツラン平原
○ミシシッピ川盆地とロシア低地
○西インド諸島とマライ諸島
○三つの地中海地域

Krebs の “Vergleichende Länderkunde”⁷⁹⁾ においては、“Spezielle Vergleichende Länderkunde” として、ミシシッピ川の盆地とロシア低地、アバチアとウラル、ピレーネとコーカサス、アルプスとヒマラヤ、西インド諸島とマライ諸島、ツラン平原

とアラビア砂漠、種々の砂漠タイプ、インド文化圏と中国文化圏、ユーラシアと北アメリカなど多数の比較の事例があげられている。すなわち、1947 年に亡くなった Krebs は、すでに Lautensach がいう「II 隣接しない位置」に注目した比較地誌学を展開していたが、体系付けられたものではなかった。Lautensach によれば⁸⁰⁾、上記のそれぞれの位置のタイプの範囲内でこそ、最も成果のあがる比較地誌学を展開することが可能であり、比較地誌学は将来「一般比較形態変化論 Allgemeine Vergleichende Formenwandellehre」として、系統地理学に含まれる課題をもっていることが指摘されている。

「地理的形態変化論」を導入した地誌学の研究は、5段階の部分から構成されなくてはならない⁸¹⁾。第1段階では、研究対象地域の地理的形態を個々の専門分野から記載する。様式だけに限ってみるならば、彼の地誌学研究はいずれもいわゆる「静的地誌」の様式を採用している。彼はすでに 1930 年代から Spethmann の “Dynamische Länderkunde” には批判的で、「……この（筆者注 静的地誌の）順序は、直線的に続く因果の鎖 Kausalkette を意味しているのではない。この種の因果の鎖は、地誌学には存在しない。それはあまりに秩序立てられている」と述べ、人間・集落・交通などの人文的な要素を「何もない空の地域」に設置し、次に地形・気候などを取りあげるのでは目的になかった記載とはいえない、と指摘している⁸²⁾。第2段階では、四つのカテゴリーから「形態変化」の分析を行う。彼は早くから文化景観の発生論的な考察にも注目し、すでに 1930 年代初期に Passarge の気候地形の考え方を導入することによって、現在の文化景観を構成する地理的形態を「生存している形態 lebende Formen」と「死の形態 tote Formen、化石的形態 fossile, Formen」とに分類して地域の変化を把握することを主張している⁸³⁾。景観像はそれぞれ深く過去に根付いているのであり、「形態変化」を分析する際に

もちろんこの発生論的な考察が含まれている⁸⁴⁾。

第3段階において分析結果を総合すると共に、これらを基にして研究地域をいくつかの「景観」に区分する。第4段階では、こうして生じた土地の断片を“Land”として記載し、第5段階において研究地域全体の性格を記載する。彼の研究では、1964年の著書“Die Iberische Halbinsel”⁸⁵⁾が上記の一連の方法を忠実に導入している。

VI 結び

Lautensachの「地理的形態変化論」は、イベリア半島という地域の「地誌的一般化」から出発し、彼自身による総合的なタイプとしての地域区分の重視と、ドイツ地理学史上1964年代に入って盛んに主張され始めた“Land”と「景観」との分離を基にし、地理的実体の「連続性」に注目することによって、後年タイプとしての景観区分の基盤へと発展した。彼自身が、Schlüterの弟子である、と明記している通り⁸⁶⁾、彼の「形態変化論」は初期の「地誌的形態変化」の段階から、「相観 Physiognomie」として把握可能な地理的形態・地理的現象の規則的な変化を指していた。しかし、景観区分を行う段階になると、その明確な基準として「気候」が前面に押し出されてくるという弱点をもっていた。そのため、文化圏や、工業中心部・消費地・原料地域、および積み替え港をもつ世界の貿易組織のように、文化・社会地理学上生じている「形態変化」の他のカテゴリーが見落とされている⁸⁷⁾、という批判が出されるに至った。

彼はすでに1930年代初期から、「個性研究の地誌学研究と、全体的考察としての系統地理学とは、一方なくして一方を考えることはできない。これらは反対に、常に有効にかみ合わなくてはならない」⁸⁸⁾と述べている。「地理的形態変化」の追究は系統地理学の課題であるが、彼が半生を捧げた地誌学は、この理論を通してのみ地理学の全体系下に確実に、

しかも有効に組み込まれるのであった。

既述のように、Lautensachは1930年代から「地誌的比較」に注目し、彼自身、彼の見解の下での「比較地誌学」とKrebsのそれとの関連について触れている⁸⁹⁾。視点をかえて、ドイツ比較地誌学の歴史の中での彼の地誌学の成立過程の考察が、今後の課題として残される。

本稿を作成するにあたり、ご指導を賜った筑波大学高野史男教授に心から感謝申し上げます。

(1980年2月15日 受付)

(1980年5月10日 受理)

注および文献

- 1) Beck, H. (1973): *Geographie. Europäische Entwicklung in Texten und Erläuterungen*. K. Alber, Freiburg, S. 399~406.
- Dickinson, R. (1969): *The makers of modern geography*. Routledge & Kegan Paul, London, pp. 161~164.
- James, P.E. (1972): *All possible worlds. A history of geographical ideas*. Odyssey, Indianapolis, p. 241.
- 2) 広重 徹 (1965): 『科学と歴史』みすず書房, p. 5, p. 34.
- 3) Beck, H. 前掲 1) S. 305~325.
- 4) Hettner, A. (1927): *Die Geographie, ihre Geschichte, ihr Wesen und ihre Methoden*. F. Hirt, Breslau, S. 122~124.
- 5) Hettner, A. 前掲 4) S. 122, S. 129.
- 6) Hettner, A. 前掲 4) S. 147.
- 7) Schlüter, O. (1928): *Die analytische Geographie der Kulturlandschaft Zeits. d. Ges. f. Erdk. z. Berlin, Sonderband*. S. 388~411.
- 8) Passarge, S. (1912): *Physiologische Morphologie*. *Pet. Mitt.*, 58, S. 5~8.
- 9) Passarge, S. (1921): *Vergleichende Landschaftskunde. H.I. Aufgaben und Methoden der vergleichenden Landschaftskunde*. D. Reimer, Berlin, S. IV.
- 10) Passarge, S. (1924): *Landeskunde und vergleichende Landschaftskunde. Zeits. d. Ges. f. Erdk. z. Berlin*, 59, S. 331~337.
- 11) Passarge, S. 前掲 9) S. 56~57.

PassargeはLinnéの綱 Klassen・目 Ordnung・

- 科 Familien・属 Gattung にならい、気候が景観の本質を最も強く制約する、という視点から、最も広い地域として気候に注目した“Klimagürtel”をまず決定している。これは次に植生・土壌のような気候との結合物 Klimaverbindungen によって“Klassen”に分けられる。さらに主として地形によって“Ordnung”が続いて地形・岩石・地質・水・植生によって“Familien”と“Gattung”が決定される。
- 12) 田村百代 (1980) : H. ラウテンザッハと田中啓爾の地誌学研究への地形学者の影響——“Palimpsest”としての地域——。地理評, **53**, pp.45~53.
- Bluntschli, H. (1921) : Die Amazonassiedlung als harmonischer Organismus. *Geogr. Zeits*, **27**, S.49~67.
- Krebs, N. (1923) : Natur und Kulturlandschaft. *Zeits. d. Ges. f. Erdk. z. Berlin*, **58**, S.81~94.
- Gradmann, R. (1924) : Das harmonische Landschaftsbild. *Zeits. d. Ges. f. Erdk. z. Berlin*, **59**, S.129~147.
- 13) Spethmann, H. (1928) : *Dynamische Länderkunde*. F.Hirt, Breslau, S.50, S.58, S.115.
- 14) Troll, C. (1966) : Hermann Lautensachs Lebenswerk zu seinem 80. Geburtstag. *Erdkunde*, **20**, S.243~252.
- 15) Lautensach, H. (1928) : Morphologische Skizze der Küsten Portugals. Ein länderkundlicher Ausschnitt. *Zeits. d. Ges. f. Erdk. z. Berlin*, **Sonderband**, S.296~346.
- 16) Lautensach, H. (1932) : Portugal. I. Teil. Das Land als Ganzes. *Pet. Mitt. Erg.*, H.213.
- Lautensach, H. (1937) : Portugal. I. Teil. Die portugiesischen Landschaften. *Pet. Mitt. Erg.*, H.230.
- 17) Lautensach, H. (1932) : Die länderkundliche Gliederung Portugals. *Geogr. Zeits.*, **38**, S.193~205, S.271~284.
- 18) Lautensach, H. (1964) : *Die Iberische Halbinsel*. Keyser, München, S.14.
- 19) Lautensach, H. (1967) : Wesen und Methoden der geographischen Wissenschaft. Wiss. Buchges., Darmstadt, S.18. (Unveränderter Nachdruck aus : Handb. d. geogr. Wissens., Erster Teil. 1933, S.23~56. 未見)
- 20) Lautensach, H. (1973) : Ueber die Erfassung und Abgrenzung von Landschaftsräumen.
- K.Paffen hrsg. *Das Wesen der Landschaft*. Wiss. Buchges., Darmstadt, S.20~38. (Comptes Rendus du Congrès International de Géographie II, 1938, pp.12~26. 未見)
- 21) Lautensach, H. (1934) : Hauptergebnisse meiner Koreareise. *Pet. Mitt.*, **80**, S.172~175, S.213~217, S.256~259.
- 22) Lautensach, H. (1945) : *Korea. Eine Landeskunde aufgrund eigener Reisen und der Literatur*. K.F.Koehler, Leipzig.
- Lautensach, H. (1950) : *Korea. Land-Volk-Schicksal*. K.F.Koehler, Leipzig.
- 23) Lautensach, H. 前掲 18)
- 24) Lautensach, H. 前掲 17) S.199.
- 25) Lautensach, H. 前掲 20) S.35.
- 26) Lautensach, H. 前掲 18) S.32.
- 27) Lautensach, H. 前掲 17) S.272.
- 28) Lautensach, H. 前掲 17)
- 29) Lautensach, H. 前掲 17) S.193.
- 30) Lautensach, H. (1952) : Der Geographische Formenwandel. Studien zur Landschaftssystematik. *Colloquium Geogr.*, **3**, S.12~15.
- 31) 野間三郎 (1963) : 『近代地理学の潮流』大明堂, pp.82~84, p.94.
- 32) Lautensach, H. (1952) : Otto Schlüters Bedeutung für die methodische Entwicklung der Geographie. *Pet. Mitt.*, **96**, S.219~231.
- 33) Lautensach, H. 前掲 19) S.22.
- 34) Lautensach, H. 前掲 17) S.198.
- 35) Lautensach, H. 前掲 17) S.196.
- 36) Lautensach, H. 前掲 19) S.22.
- 37) Lautensach, H. 前掲 17) S.197.
- 38) Lautensach, H. 前掲 17) S.197.
- 39) Lautensach, H. 前掲 20) S.31.
- 40) Lautensach, H. 前掲 19) S.18.
- 41) Passarge, S. 前掲 10)
- 42) Lautensach, H. 前掲 20) S.32.
- 43) Jaeger, F. (1934) : Versuch einer anthropogeographischen Gliederung der Erdoberfläche. *Pet. Mitt.*, **80**, S.353~356.
- 44) Lautensach, H. 前掲 20) S.32.
- 45) Lautensach, H. 前掲 20) S.35.
- 46) Lautensach, H. 前掲 17) S.199.
- 47) Lautensach, H. 前掲 22) S.469~477.
- 48) Lautensach, H. 前掲 22) S.188~191.
- 49) Committee of the Geogr. Association (1937) :

- Classifications of regions of the world. *Geogr.*, 22, pp.253~282.
- 50) Hartshorne, R. (1961): *The nature of geography*. Reprinted. E. Brothers, Ann Arbor, pp. 149~158.
- 51) Hartshorne, R. 前掲 50) pp.285~365.
- 52) Lautensach, H. (1953): Ueber die Begriff Typus und Individuum in der geographischen Forschung. *Münchner Geogr. Hefte*, 3, S.5~33.
- 53) Lautensach, H. 前掲 32) S.227.
- 54) Bobek, H. und Schmithüsen, J. (1949): Die Landschaft im logischen System der Geographie. *Erdkunde*, 3, S.112~120.
- 55) Lautensach, H. 前掲 32) S.228.
- 56) Lautensach, H. 前掲 30)
Lautensach, H. 前掲 32)
Lautensach, H. 前掲 52)
- 57) Lautensach, H. 前掲 30) S.IV.
- 58) 地理学が研究対象とする地表面 Erdoberfläche は、岩石圏 Lithosphäre・水圏 Hydroshäre・生物圏 Biosphäre・人類圏 Anthroposphäre・大気圏 Atmosphäre の5圏から成り、これらの圏を総称して“Geosphäre” “Erdhülle” と呼んでいる。Lautensach がいう「地理的実体」とは、この“Geosphäre” “Erdhülle” に相当する。彼によれば、「地理的実体」は「地理的形態 geographische Formen」と呼ばれる個々の要素、すなわち具体的にはさまざまな自然界の個別的な事象から成る。彼はこの「地理的形態」のうち、とくに「運動 Bewegung」として生じる要素（交通、漁業、大気や水の流れなど）を「地理的現象 geographische Erscheinungen」と名付けている。(Lautensach, H. 前掲 30) S.2./Carol, H.(1957): Grundsätzliches zum Landschaftsbegriff. *Pet. Mitt.*, 101, S.93~97.)
- 59) Lautensach, H. 前掲 30) S.3.
- 60) Lautensach, H. 前掲 20)
- 61) Lautensach, H. 前掲 30) S.3, S.16.
- 62) Lautensach, H. 前掲 30) S.15.
- 63) Lautensach, H. 前掲 30) S.4.
- 64) Lautensach, H. 前掲 30) S.6.
- 65) Lautensach, H. 前掲 30) S.11, S.114~122.
- 66) Lautensach, H. 前掲 30) S.11~12, S.127~129.
- 67) Lautensach, H. 前掲 30) S.8, S.11~12, S.122~125.
- 68) Lautensach, H. 前掲 30) S.156.
- 69) Lautensach, H. 前掲 30) S.157.
- 70) Lautensach, H. 前掲 30) S.9, S.11.
- 71) Lautensach, H. 前掲 30) S.169.
- 72) Lautensach, H. 前掲 52) S.13.
- 73) Lautensach, H. 前掲 19) S.26.
- 74) Lautensach, H. 前掲 30) S.181~182.
- 75) Lautensach, H. 前掲 52) S.9.
- 76) Lautensach, H. 前掲 18) S.301.
Lautensach, H. 前掲 30) S.180.
Lautensach, H. 前掲 52) S.25.
- 77) Lautensach, H. 前掲 30) S.176.
Lautensach, H. 前掲 52) S.26~27.
- 78) Lautensach, H. 前掲 30) S.176~178, S.183.
Lautensach, H. 前掲 52) S.27.
- 79) Krebs, N.(1966): *Vergleichende Länderkunde*. Dritte Auflage. K.F.Koehler, Stuttgart.
- 80) Lautensach, H. 前掲 30) S.178, S.182.
- 81) Lautensach, H. 前掲 30) S.180.
- 82) Lautensach, H. 前掲 19) S.31.
- 83) 田村百代 前掲 12)
- 84) Lautensach, H. 前掲 30) S.3.
- 85) Lautensach, H. 前掲 18)
- 86) Lautensach, H. 前掲 32) S.219.
- 87) Troll, C. 前掲 14)
Bobek, H. (1953): H.Lautensach's Geographischer Formenwandel—Ein Weg zur Landschaftssystematik. *Erdkunde*, 7, S.288~293.
- 88) Lautensach, H. 前掲 19) S.26.
- 89) Lautensach, H. 前掲 30) S.177, S.183.

Hermann Lautensach's regional geographical studies,
with special reference to the formation of the theory of
"Geographischer Formenwandel"

Momoyo TAMURA

Hermann Lautensach (1886-1971) is one of the most leading geographers who contributed to the development of regional geography in Germany. He is famous not only for his studies on the Iberian Peninsula as well as on the Korean Peninsula, but also for his theory of "Formenwandel". His idea of "Länderkundlicher Formenwandel" conceived in the earlier stage of the development of his thought is different from his concept of "Geographischer Formenwandel" developed in the later stage.

He carried out the field studies on the Iberian Peninsula in the latter half of the 1920's and from then developed the theory of "Formenwandel". The results of these field studies were published as his "Habilitationsschrift" titled "Morphologische Skizze der Küsten Portugals", in 1928 and also as a series of regional geographical works on the Iberian Peninsula in the 1930's based on the theory of "Länderkundlicher Formenwandel". "Formenwandel" means the areal variations of geographical phenomena and his "Länderkundlicher Formenwandel" resulted from the generalization of the characteristics of areas. In 1945 he also published a work on the Korean Peninsula based on this theory of "Länderkundlicher Formenwandel".

He did not expound his theory of "Geographischer Formenwandel" until 1951. In this theory, he named four categories of the areal variations of the surface of the earth as follows: 1. planetarischer Wandel, 2. west-östlicher Wandel, 3. peripher-zentraler Wandel, and 4. hypsometrischer Wandel. In his view, the earth's surface can be classified into some "Landschaften", based on the above four categories of "Geographischer Formenwandel". So "Landschaft" is a generic region. In geography only such typified regions are able to be compared with each other. A comparative approach is effective to regional geography. Therefore, the region dealt with in regional geography must be not only "Land" or "Raumindividuum" but also "Landschaft" or "Raumtyp", considering comparative regional geography. Lautensach reached the conclusion that regional geography, the center of geography, should be based upon his theory of "Geographischer Formenwandel". This idea was finally given concrete expression in his work on the Iberian Peninsula published in 1964.